

注意事項

1. 試験問題の数は60問で解答時間は正味2時間30分である。
2. 試験問題の持帰りを認めない。
3. 解答方法は次のとおりである。
 - (1) 各問題にはaからeまでの五つの答えがあるので、そのうち質問に適した答えを一つ選び、次の例にならって答案用紙に記入すること。

(例) 101 県庁所在地はどれか。

- a 大宮市
- b 川崎市
- c 神戸市
- d 倉敷市
- e 別府市

正解は「c」であるから答案用紙の

101 (a) (b) (c) (d) (e) のうち (c) をマークして

101 (a) (b) (c) (d) (e) とすればよい。

- (2) 答案の作成にはHBの鉛筆を使用し、濃くマークすること。

良い解答の例…… (c) (濃くマークすること。)

悪い解答の例…… (c) (解答したことにならない。)
- (3) 答えを修正した場合は、必ず「消しゴム」であとが残らないように完全に消すこと。鉛筆の色が残ったり「」のような消し方などをした場合は、修正したことにならないので注意すること。
- (4) 1問に二つ以上解答した場合は誤りとする。
- (5) 答案用紙は折り曲げたりメモやチェック等で汚したりしないよう特に注意すること。

1 30歳の3回経妊婦。胎動を感じないことを主訴に来院した。最後に妊婦健康診査を受けたのは5週前で、そのときは胎児心拍動は確認され妊娠24週相当と言われた。現在、外診では子宮底長は24、25週相当で、胎児死亡が確認された以外は内診では異常を認めない。

直ちに行うべき母体の血液検査はどれか。

- a 胎児ヘモグロビン
- b フィブリノゲン
- c グルコース
- d GOT・GPT
- e エストリオール

2 日齢14の新生児。在胎25週3日で出生した。身長29.0 cm、体重558 g。Apgarスコア4点(1分)、8点(5分)。出生時啼泣しなかったが生後4分に挿管し、すぐに呼吸を開始した。胃液のマイクロバブルテストは陽性であった。日齢6の検査所見：赤血球565万、Hb 11.5 g/dL、Ht 44%、白血球13,600。血清IgM 133mg/dL(基準0~20)。日齢14の胸部エックス線写真(別冊No. 1)を別に示す。

診断はどれか。

- a 肺炎
- b 無気肺
- c 肺出血
- d 呼吸窮迫症候群
- e Wilson-Mikity症候群

別冊
No. 1 写真

3 69歳の女性。家族に伴われ来院した。12年前から手指振戦、無動および歩行障害のためにドパミン作動薬による治療を受けてきた。最近症状が悪化したので薬を増やしたところ、「Aちゃん(孫の名前)が呼んでいる。」と言い、夜中に飛び起きて近隣を歩き回ったり、大声での独り言が目立ち、家族が注意しても言動が改善しなくなった。身長150cm、体重48kg。意識は清明。四肢腱反射低下。両手首と肘とに筋強剛を認める。歩行は前屈みで両腕の振りを認めない。

この患者でまず行うべき薬物療法はどれか。

- a 現在の薬物を減量する。
- b 抗コリン薬に変更する。
- c 抗精神病薬を追加する。
- d 抗うつ薬を追加する。
- e 抗不安薬を追加する。

4 62歳の女性。言動の異常を認めた家族に伴われ来院した。4か月前から「タヌキがいろいろなことを言っている。」と言い、応接間の机の上にご飯や千円札をのせるといった行動が見られるようになった。家族が理由を尋ねると、「『私は東京のタヌキです。孫と一緒に来ました。おなかが空いているので何か下さい。そうしないと、あなたの家に祟りがありますよ。』といったような声が聞こえてくる。」と言う。精神疾患の既往はない。身長155cm、体重48kg。意識は清明。神経学的身体診察では異常を認めない。日常生活動作<ADL>は自立している。頭部CTでは年齢相応の変化以外に異常はない。

この疾患で正しいのはどれか。

- a 高齢はリスク要因である。
- b 感情鈍麻が存在する。
- c 痴呆が存在する。
- d 抗不安薬による薬物療法を行う。
- e 予後は不良である。

5 10歳の男児。母親が相談に来院した。正常分娩で運動発達は正常で「賢そうな子供」とよくほめられた。3歳ころにいくつかの発語があったが3か月で消えてしまった。同じころ、ナンバープレートの数字を覚えて積木で並べることがあった。またよく迷子になり、全く泣かないので見つけるのが大変だった。現在、かん高い声でオウム返しをしたりする。数字と難しい漢字とを覚えるのが得意で、電話帳をボロボロになるまで絶えずながめている。強い偏食があり、食べるものは10種類ほどに限られている。

この疾患について誤っているのはどれか。

- a 罹患率は男児に高い。
- b 発作性脳波異常を認めることが多い。
- c 学習能力は正常に保たれる。
- d 多動を伴うことが多い。
- e 認知発達障害と考えられている。

6 25歳の女性。3日前から右耳に痒痒を伴う皮疹が出現してきたので来院した。3週間前からピアス型イヤリングを使用していた。右耳介の写真(別冊No. 2)を別に示す。

行うべき検査はどれか。

- a 皮内試験
- b 貼布試験
- c 最小紅斑量試験
- d Tzanck 試験
- e リンパ球刺激試験

別冊
No. 2 写真

7 17歳の女子。体幹と四肢とに多発する皮疹を主訴に来院した。皮疹は出生時から存在する。脊柱側弯を認める。体幹の写真(別冊No. 3)を別に示す。

考えられる疾患はどれか。

- a 結節性硬化症
- b von Recklinghausen 病
- c Turner 症候群
- d Sturge-Weber 症候群
- e Kasabach-Merritt 症候群

別冊
No. 3 写真

8 47歳の男性。3日前から右眼の眼痛と流涙とが出現してきたので来院した。右眼のフルオレセイン生体染色による前眼部写真(別冊No. 4)を別に示す。

この疾患の原因として考えられるのはどれか。

- a アデノウイルス
- b エンテロウイルス
- c 単純ヘルペスウイルス
- d クラミジア
- e マイコプラズマ

別冊
No. 4 写真

9 36歳の男性。3日前から右の耳痛があり、昨日から耳閉塞感が出現した。今朝、洗面時に右顔面の麻痺に気づき、めまいも自覚したため来院した。麻痺は中等度である。耳下腺に腫瘤を触れず、鼓膜所見も正常である。右耳介の写真(別冊No. 5)を別に示す。

この疾患で正しいのはどれか。

- (1) 帯状ヘルペスウイルスの感染による。
- (2) 味覚の低下を伴う。
- (3) 涙の分泌は障害されない。
- (4) 角膜反射が消失する。
- (5) アブミ骨筋反射が消失する。

- a (1)、(2)、(3)
- b (1)、(2)、(5)
- c (1)、(4)、(5)
- d (2)、(3)、(4)
- e (3)、(4)、(5)

別冊
No. 5 写真

10 12歳の女兒。突然の両側の難聴を主訴に来院した。昨日学校で友人とクラブ活動のことで意見の相違があり激論となった。純音聴力検査では両耳とも水平型のオーディオグラムで平均聴力は右 45 dB、左 60 dB。聴性脳幹反応(ABR)の閾値は左右とも 10 dBである。

考えられる疾患はどれか。

- a ウイルス性難聴
- b 遺伝性難聴
- c 外リンパ瘻
- d 心因性難聴
- e 感音難聴

11 1歳の男児。不機嫌と食欲不振とを主訴に来院した。昨夜から突然39℃台の発熱をきたしている。突発性発疹は罹患済みである。軟口蓋に紅暈を伴った小水疱を認めるが、口腔前方部と歯肉部とは認めない。

この疾患について正しいのはどれか。

- a 夏季に多い。
- b 潜伏期は10～14日である。
- c 四肢末端に発疹を伴う。
- d 症状は10～14日続く。
- e 抗ウイルス薬を投与する。

12 45歳の男性。工事現場で鉄パイプをハンマーで打っていたところ、右眼に火花が飛入したように感じ、視力障害が出現したので来院した。視力は右眼前手動弁(矯正不能)、左1.2(矯正不能)。細隙灯顕微鏡検査で右眼の角膜に穿孔創と前房出血とを認め、眼底は透見できない。

次に行う検査で適切でないのはどれか。

- a 眼部超音波検査
- b 頭部エックス線単純撮影
- c 頭部エックス線断層撮影
- d 頭部単純CT
- e 頭部単純MRI

13 56歳の男性。多量の膿性喀痰と労作時呼吸困難とが出現したので来院した。10歳代から咳と喀痰とを自覚していた。20歳時に慢性副鼻腔炎を指摘され、30歳代から咳と喀痰とが増悪したが放置していた。喫煙歴はない。胸部エックス線写真(別冊No. 6A)、胸部CT(別冊No. 6B)および肺生検H-E染色標本(別冊No. 6C)を別に示す。

この患者でみられないのはどれか。

- a 一秒量の低下
- b 肺活量の低下
- c 残気率の増加
- d 拡散能の低下
- e 動脈血酸素分圧の低下

別冊
No. 6 写真A、B、C

14 55歳の男性。2か月前から労作時の息切れと乾性咳とが出現し、最近増悪したので来院した。35年前から18年間絶縁体の製造に従事していた。胸部エックス線写真(別冊No. 7A)と気管支肺胞洗浄液May-Giemsa染色標本(別冊No. 7B)とを別に示す。

この疾患で正しいのはどれか。

- a ばち指はみられない。
- b 胸部聴診ではfine crackles(捻髪音)が聴取される。
- c 胸水貯留はみられない。
- d 呼吸機能検査では肺活量は正常である。
- e 呼吸機能検査では拡散能は正常である。

別冊
No. 7 写真A、B

15 65歳の男性。1か月前から軽度の咳と喀痰とを自覚したので来院した。6か月前から右背部痛が出現し、湿布薬を使用して様子を見ていた。最近、右上肢の疼痛も出現してきた。喫煙歴は20歳時から20～30本/日である。胸部エックス線写真(別冊No. 8A)、胸部MRIのT₁強調冠状断像(別冊No. 8B)および肺生検組織H-E染色標本と細胞診Papanicolaou染色標本(別冊No. 8C、D)を別に示す。

この患者でみられないのはどれか。

- a 右上肢の筋萎縮
- b 右上肢の浮腫
- c 右縮瞳
- d 右眼瞼下垂
- e 右顔面発汗過多

別冊
No. 8 写真A、B、C、D

16 14歳の女子。生来健康であったが、本日午後、プールで水泳中に突然沈み、心肺蘇生術を受けながら救急車で搬送された。父親が45歳で突然死している。蘇生後の心電図(別冊No. 9)を別に示す。

この疾患で正しいのはどれか。

- (1) 心室頻拍を発症する危険がある。
- (2) 先天性心疾患に合併することが多い。
- (3) 心機能の低下がみられる。
- (4) 緊急ペーシングが必要である。
- (5) β 受容体遮断薬が有効である。

- a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

別冊
No. 9 図

17 39歳の男性。2日前から咽頭痛と発熱とが出現し、昨夜から呼吸困難、嚥下痛および嚥下困難が増強したため、明け方に救急外来を受診した。独歩できるが、喘鳴が強く、呼吸回数も多い。扁桃は軽度の発赤のみで腫脹や白苔付着はない。喉頭で強い狭窄音を聴取するが、その他の聴診所見で異常を認めない。頸部の腫脹はなく、触診で腫瘤を触れない。

この患者でまず行うべき検査はどれか。

- a 一秒率測定
- b 喉頭の内視鏡検査
- c 胸部エックス線撮影
- d 頸部MRI
- e 上部消化管造影

18 6歳の男児。乳児期から心室中隔欠損症を指摘されている。自覚症状はないが入学後の管理について指導を受けるために来院した。脈拍80/分、整。第4肋間胸骨左縁で3/6度の収縮期雑音を聴取する。心電図は心室肥大所見を認めない。胸部エックス線正面写真で心拡大はなく、肺血管陰影には異常を認めない。

この患児に適切なのはどれか。

- (1) 2か月毎に心電図検査をする。
- (2) 水分摂取は控え目にする。
- (3) 体育実技は軽い運動のみにする。
- (4) 抜歯の際には抗菌薬を服用する。
- (5) 予防接種は普通に受ける。

- a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

19 72歳の男性。今朝駅の階段を昇っているときに激しい動悸と呼吸困難とが生じ、その後意識消失をきたし救急車で来院した。来院時には意識は回復していた。約3年前から労作時に軽度の動悸と息切れとを自覚していたが、安静によってすぐに症状の軽減がえられるため精査は受けていない。脈拍65/分、整。血圧102/62 mmHg。頸部に放散する4/6度の収縮期雑音を第2肋間胸骨左縁から前胸部にかけて広い範囲に聴取する。左室圧<LVP>曲線と大動脈圧<AoP>曲線との同時記録(別冊No. 10)を別に示す。

この疾患について正しいのはどれか。

- (1) 突然死をきたすことがある。
- (2) 高齢者では動脈硬化性が多い。
- (3) 二尖弁が病因の一つである。
- (4) 早期から左室腔は拡大する。
- (5) 手術適応はない。

- a (1)、(2)、(3)
- b (1)、(2)、(5)
- c (1)、(4)、(5)
- d (2)、(3)、(4)
- e (3)、(4)、(5)

別冊
No. 10 ㊗

20 55歳の男性。強い胸痛を主訴に3日前に入院し、急性心筋梗塞と診断されて薬物療法を受けていた。今朝突然、高度の呼吸困難を訴えた。脈拍108/分、整。血圧82/60 mmHg。顔貌苦悶状で、心尖部に今までなかった4/6度の汎収縮期雑音を新たに聴取するようになった。両肺野に湿性ラ音を聴取する。

まず行うべき検査はどれか。

- a 冠動脈造影
- b 心エコー・ドップラー検査
- c 呼吸機能検査
- d 動脈血ガス分析
- e 心筋シンチグラフィ

21 45歳の男性。人間ドックの胸部エックス線検査で異常陰影を指摘され来院した。自覚症状はない。身長170 cm、体重68 kg。脈拍72/分、整。血圧154/80 mmHg。第4肋間胸骨左縁に2/6度の拡張期雑音を聴取する。胸部単純CT(別冊No. 11A)と大動脈造影写真(別冊No. 11B)とを別に示す。

この疾患について正しいのはどれか。

- (1) 動脈硬化症が病因である。
- (2) 大動脈弁輪部が拡張する。
- (3) 大動脈弁閉鎖不全を伴う。
- (4) 進行例はBentall手術の適応となる。
- (5) 心不全をきたすことはまれである。

- a (1)、(2)、(3)
- b (1)、(2)、(5)
- c (1)、(4)、(5)
- d (2)、(3)、(4)
- e (3)、(4)、(5)

別冊
No. 11 写真A、B

22 23歳の男性。健康診断で食道の異常を指摘され、精査を希望して来院した。自覚症状はない。身体所見では軽度の脾腫を認める以外に特記すべき異常はない。食道内視鏡写真(別冊No. 12A)と経動脈性門脈造影写真(別冊No. 12B)とを別に示す。

考えられる疾患はどれか。

- a 肝硬変
- b 特発性門脈圧亢進症
- c 肝外門脈閉塞症
- d Budd-Chiari症候群
- e 日本住血吸虫症

別冊
No. 12 写真A、B

23 46歳の女性。上腹部の膨満感と嘔吐とを主訴に来院した。上腹部に腫瘤を触知し、少量の腹水を認めるが、肝腫大はみられない。血清生化学所見：総ビリルビン 0.8 mg/dL、GOT 34単位(基準 40 以下)、GPT 30 単位(基準 35 以下)、アルカリホスファターゼ 225 単位(基準 260 以下)。上部消化管内視鏡による胃病変の生検組織H-E 染色標本(別冊No. 13)を別に示す。

病変の進展の判定に有用でないのはどれか。

- a 直腸診
- b 胸部エックス線撮影
- c 腹部超音波検査
- d 腹部造影 CT
- e 内視鏡的逆行性胆管造影

別 冊
No. 13 写 真

24 24歳の女性。2日前から1日8～10行の粘血便と下痢とが出現し、昨日から腹痛と発熱とをきたしたため来院した。8か月前から1日2行程度の粘血便があったが、そのまま放置していた。血液所見：赤血球 324 万、Hb 9.0 g/dL、Ht 29%、白血球 12,800、血小板 38 万。血清生化学所見：総蛋白 5.9 g/dL、アルブミン 2.9 g/dL、CRP 5.2 mg/dL(基準0.3以下)。腹部エックス線単純写真(別冊No. 14)を別に示す。

誤っている処置はどれか。

- a 絶飲食
- b 抗コリン薬投与
- c 副腎皮質ステロイド薬投与
- d 中心静脈栄養施行
- e 手術

別 冊
No. 14 写 真

25 18歳の女子。肛門部痛を主訴に来院した。6か月前から37℃前後の発熱が時折出現するようになり近医を受診したが原因不明であった。2週前から口内炎、肘関節痛および肛門部痛が出現し、体重も2kg減少した。来院時、体温 37.6℃。右下腹部に圧痛を伴う腫瘤を触知する。肛門周囲に瘻孔と腫脹とが存在し、圧迫で排膿を認める。血液所見：赤沈 48 mm/1時間、赤血球 310 万、Hb 9.1 g/dL、白血球 9,800、血小板 51 万。CRP 6.8 mg/dL(基準 0.3 以下)。

診断確定に有用な検査はどれか。

- (1) 針反応
- (2) 抗核抗体測定
- (3) ツベルクリン反応
- (4) 小腸造影
- (5) 大腸内視鏡検査

- a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

26 55歳の女性。6か月前から頸部と腰部との皮膚掻痒感が出現し、最近尿が褐色調となったので来院した。身長155 cm、体重52 kg。眼球結膜は黄染し、正中線上で肝を3 cm、左肋骨弓下に脾を2 cm 触知する。血液所見：赤血球325万、Hb 9.2 g/dl、Ht 30%、白血球5,400、血小板9万。血清生化学所見：総蛋白6.7 g/dl、アルブミン3.8 g/dl、総ビリルビン3.2 mg/dl、直接ビリルビン1.9 mg/dl、GOT 62 単位(基準40以下)、GPT 59 単位(基準35以下)、 γ -GTP 322 単位(基準8~50)、アルカリホスファターゼ782 単位(基準260以下)。肝生検組織H-E染色標本(別冊No. 15)を別に示す。

この疾患に合併するのはどれか。

- (1) 大球性貧血
- (2) 高脂血症
- (3) 骨粗鬆症
- (4) 食道静脈瘤
- (5) 潰瘍性大腸炎

- a (1)、(2)、(3)
- b (1)、(2)、(5)
- c (1)、(4)、(5)
- d (2)、(3)、(4)
- e (3)、(4)、(5)

別冊
No. 15 写真

27 63歳の女性。全身倦怠感と上腹部不快感とを訴えて来院した。右肋骨弓下に肝を3 cm 触知する。血液所見：赤血球352万、白血球2,500、血小板12万。血清生化学所見：総蛋白7.1 g/dl、アルブミン2.8 g/dl、総ビリルビン2.4 mg/dl、GOT 84 単位(基準40以下)、GPT 48 単位(基準35以下)。AFP 169 ng/ml(基準20以下)、CEA 3.7 ng/ml(基準5以下)。ICG試験(15分値)24%(基準10以下)。HBs抗原陰性、HCV抗体陽性。腹部単純CT(別冊No. 16)を別に示す。また、経動脈性門脈造影で門脈本幹の閉塞がみられた。

最も適切な治療法はどれか。

- a エタノール局所注入療法
- b 肝動脈塞栓療法
- c 経肝動脈抗癌薬注入療法
- d 経皮的マイクロ波凝固療法
- e 肝右葉切除術

別冊
No. 16 写真

28 56歳の男性。皮膚の黄染と全身の痒痒感とを主訴に来院した。1か月前から尿は濃染し、便は白色調となった。体重は10kg減少した。血清生化学所見：総ビリルビン14.2 mg/dL、直接ビリルビン10.2 mg/dL、GOT 174 単位(基準40以下)、GPT 154 単位(基準35以下)、アルカリホスファターゼ 991 単位(基準260以下)。腹部超音波写真(別冊No. 17)を別に示す。

まず行うべき処置はどれか。

- a 利胆薬投与
- b 血漿交換
- c 胆道ドレナージ
- d 内視鏡的結石除去
- e 胆嚢摘出術

別冊
No. 17 写真

29 58歳の男性。繰り返す意識消失発作のため入院した。1年前から空腹時にふらつくことがあったが、食後軽快するので放置していた。入院後も意識消失発作を数回起こし、いずれの場合もブドウ糖液の静注で改善した。意識清明。血圧142/88 mmHg。呼吸音清。肝と脾とを触知しない。血液所見：赤血球498万、Hb 14.0 g/dL、白血球6,500、血小板20万。血清生化学所見：空腹時血糖43 mg/dL、総蛋白7.3 g/dL、アルブミン4.1 g/dL、尿素窒素9 mg/dL、クレアチニン0.8 mg/dL、総ビリルビン0.5 mg/dL、GOT 37 単位(基準40以下)、GPT 54 単位(基準35以下)、アミラーゼ83 単位(基準37~160)。CEA 2.0 ng/mL(基準5以下)、CA19-9 11 U/mL(基準37以下)。腹部ダイナミックCTの動脈優位相で径1cmの濃染像を膵体部に認める。

考えられる疾患はどれか。

- a 膵体部癌
- b 膵島腫瘍
- c 膵嚢胞
- d 膵石症
- e 輪状膵

30 35歳の男性。1週前から腹部膨満感が出現したため来院した。3か月前から時々黒色便があったが放置していた。2か月で3kgの体重減少がある。身長165 cm、体重50 kg。眼瞼結膜に貧血を認める。左鎖骨上窩に小指頭大の硬いリンパ節を触知する。肺肝境界の上昇と波動のある腹部膨隆とを認める。腹腔穿刺をしたところ腹水が採取された。

この腹水について予想されるのはどれか。

- (1) 血性である。
- (2) 蛋白は少ない。
- (3) 糖は低値である。
- (4) 細胞成分は少ない。
- (5) 利尿薬に反応しにくい。

- a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

31 28歳の男性。自家用車を運転中に前の車に追突し、ハンドルで上腹部を打撲して救急車で搬送された。意識清明。呼吸数18/分。脈拍120/分、整。血圧110/78 mmHg。右上腹部に軽度の圧痛を認めるが反跳痛はない。血液所見：赤血球312万、Hb 11.2 g/dl、Ht 34%、白血球8,900。血清生化学所見：GOT 82単位(基準40以下)、GPT 78単位(基準35以下)、LDH 410単位(基準176～353)、アルカリホスファターゼ280単位(基準260以下)、アミラーゼ90単位(基準37～160)。腹部造影CT(別冊No. 18)を別に示す。

まず行うべきことはどれか。

- (1) 補液
- (2) 利尿薬投与
- (3) 肝底護薬投与
- (4) 血液型交差適合試験
- (5) 選択的腹腔動脈造影

- a (1)、(2)、(3)
- b (1)、(2)、(5)
- c (1)、(4)、(5)
- d (2)、(3)、(4)
- e (3)、(4)、(5)

別冊
No. 18 写真

32 27歳の男性。3日前から急にめまいと疲労感とが増強したため来院した。2週前に感冒様症状をきたし、市販の総合感冒薬を服用した。母親が若いころ先天性溶血性貧血のため摘脾術を受けている。身体所見で高度の貧血と軽度の黄疸とを認める。血液所見：赤血球250万、Hb 7.6 g/dl、Ht 22%、網赤血球1%、白血球7,800、血小板18万。骨髓血塗抹 May-Giemsa 染色標本(別冊No. 19)を別に示す。

来院時の病態はどれか。

- a 葉酸欠乏症
- b 溶血性クリーゼ
- c 急性赤芽球癆
- d 血球貪食症候群
- e 薬物による骨髓障害

別冊
No. 19 写真

33 56歳の男性。倦怠感と腹部膨満感を訴えて来院した。6か月前から左上腹部の重圧感を自覚し、少量の摂食で満腹となるようになった。顔色は不良で、るいそがある。右肋骨弓下に肝を4cm、左肋骨弓下に脾を5cm触知し、いずれも弾性硬で圧痛はない。血液所見：赤血球320万、Hb 9.5 g/dL、Ht 31%、網赤血球13%、白血球23,000(前骨髄球0.5%、好中性骨髄球3.0%、好中性後骨髄球3.5%、桿状核好中球13.0%、分葉核好中球55.0%、好酸球2.0%、好塩基球3.0%、単球4.0%、リンパ球16.0%、赤芽球5個/100白血球)、血小板57万。好中球アルカリホスファターゼスコア320(基準120~320)。末梢血塗抹May-Giemsa染色標本(別冊No. 20)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 骨髄異形成症候群
- b 慢性骨髄性白血病
- c 本態性血小板血症
- d 原発性骨髄線維症
- e hairy cell leukemia

別冊
No. 20 写真

34 21歳の女性。2週前から発熱をきたし、近医で解熱薬と抗菌薬との投与を受けたが軽快せず、昨日から紫斑が出現したため入院した。左肋骨弓下に脾を3cm触知する。血液所見：赤血球210万、Hb 6.8 g/dL、Ht 23%、網赤血球25%、白血球2,300(好中球23%、好酸球2%、単球5%、リンパ球67%、異型リンパ球3%)、血小板2.3万。骨髄血塗抹May-Giemsa染色標本(別冊No. 21)を別に示す。

この患者の血中で増加するのはどれか。

- (1) 総蛋白
- (2) 直接ビリルビン
- (3) LDH
- (4) フェリチン
- (5) ハプトグロビン

- a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

別冊
No. 21 写真

35 70歳の女性。全身倦怠感と食欲不振のため入院した。3年前から、腰痛と膝関節痛のため非ステロイド性抗炎症薬を服用していた。尿所見：尿量 2,200 ml/日、蛋白(±)、蛋白定量 1.5 g/日。血液所見：赤血球 320 万、Hb 9.0g/dL、白血球 4,000、血小板 12 万。血清生化学所見：総蛋白 9.5 g/dL、アルブミン 4.0 g/dL、尿素窒素 28 mg/dL、クレアチニン 1.7 mg/dL、Na 138 mEq/L、K 4.5 mEq/L、Cl 115 mEq/L、Ca 13.0 mg/dL、P 3.7 mg/dL。

診断に必要な検査はどれか。

- (1) 血清蛋白免疫電気泳動
- (2) 血清活性型ビタミン D_s 測定
- (3) 血清 PTH 測定
- (4) 腎生検
- (5) 骨髓生検

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

36 70歳の男性。全身倦怠感と食欲不振のため入院した。6か月前から肺癌のために化学療法を受けていた。意識は清明で、身体所見に異常はない。尿所見：比重 1.014、浸透圧 600 mOsm/l(基準 50~1,300)、蛋白(-)、糖(-)。血清生化学所見：尿素窒素 10mg/dL、クレアチニン 0.6 mg/dL、尿酸 1.1 mg/dL、Na 120 mEq/L、K 4.0 mEq/L、Cl 87 mEq/L、浸透圧 249 mOsm/l(基準 275~288)。

この患者で行うべき処置はどれか。

- a サイアザイド系利尿薬の投与
- b マニトールの投与
- c 生理食塩液の輸液
- d 水制限
- e 食塩水の経口投与

37 26歳の女性。発熱と右腰部痛のため来院した。2、3日前から排尿時痛があり、昨日から悪寒戦慄を伴う 39℃の発熱と右腰部に激しい痛みとがあった。体温 40℃。右肋骨脊柱角部叩打痛を認める。尿路感染症と尿路結石症との既往はない。尿所見：蛋白 1+、糖(-)、潜血 1+、沈渣に無数の白血球を認める。

この疾患の起炎菌として最も頻度が高いのはどれか。

- a *Escherichia coli*
- b *Klebsiella pneumoniae*
- c *Proteus vulgaris*
- d *Pseudomonas aeruginosa*
- e *Staphylococcus aureus*

38 75歳の男性。昨日から凝血塊を伴う血尿を認めたため来院した。3か月前に血尿に気付いたが症状がないため放置していた。骨盤部 MRI の T₁ 強調像(別冊 No. 22A)、造影 T₁ 強調像(別冊 No. 22B)および膀胱内視鏡写真(別冊 No. 22C)を別に示す。

この疾患について正しいのはどれか。

- (1) 尿管腫瘍を合併しやすい。
- (2) 家族内発生が多い。
- (3) 組織学的には腺癌が多い。
- (4) インターフェロン療法が有用である。
- (5) 尿路変向術が必要である。

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

別冊
No. 22 写真 A、B、C

39 28歳の女性。3年前から月経痛が増強し、最近では月経時以外にも下腹部痛が持続するので来院した。内診で子宮は正常大で付属器を触知しないが、子宮の可動性が制限されている。超音波検査と子宮がん検診とでは異常を認めない。

診断のために有用なのはどれか。

- a 腹部触診
- b 外陰視診
- c 腔鏡診
- d 子宮ゾンデ診
- e 直腸診

40 53歳の女性。1か月前から下腹痛に加え腹部膨満感があり、近医を受診し下腹部腫瘤を指摘され来院した。閉経51歳。身長158cm、体重57kg。腹囲83cmで臍上に達する腫瘤を認めた。内診では子宮は凹凸のある腫瘤と一塊となり、可動性はなかった。腫瘍マーカーはCEA 77.4 ng/ml(基準5以下)、CA19-9 805.3 U/ml(基準37以下)、CA125 52.0 U/ml(基準35以下)であった。下腹部MRIのT₂強調像(別冊No. 23A)を別に示す。卵巣腫瘍の診断で開腹手術を行ったが、腹腔内に散在する腫瘍の一部は切除できなかった。腹水は約300mlで血性であった。摘出卵巣腫瘍のH-E染色標本とアルシアン・ブルー染色標本(別冊No. 23B、C)とを別に示す。

正しいのはどれか。

- (1) MRI所見は臨床進行期分類の根拠になる。
- (2) 腹水細胞診は不要である。
- (3) 卵巣漿液性腺癌である。
- (4) 残存腫瘍の有無は予後に関係する。
- (5) 長期の多剤併用化学療法を行う。

- a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

別冊
No. 23 写真A、B、C

41 43歳の男性。腹部の腫瘤に気づき、精査を希望して来院した。健康診断で時々高血圧、軽度の蛋白尿および血尿を指摘されていた。父親と叔父とが血液透析を受けている。血圧160/94 mmHg。腹部に凹凸のある巨大な腫瘤を触れる。尿所見：蛋白1+、糖(-)、潜血1+。血液所見：赤血球350万、Hb 10.1 g/dL、白血球7,800。血清生化学所見：総蛋白7.5 g/dL、クレアチニン4.6 mg/dL。経口造影剤投与後の腹部単純CT(別冊No. 24)を別に示す。

この疾患について正しいのはどれか。

- (1) 常染色体劣性遺伝である。
- (2) 病態形成の原因は基底膜の菲薄化による。
- (3) 他臓器に嚢胞形成を認める。
- (4) くも膜下出血を起こす危険性がある。
- (5) 腎摘除術が必要である。

- a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

別冊
No. 24 写真

42 35歳の女性。月経血量が減少したので来院した。結婚後2回の人工妊娠中絶と1回の自然流産の既往がある。月経は28日型、整であるが、月経持続日数は1日である。最近2年間の不妊も訴えている。子宮卵管造影写真(別冊No. 25)を別に示す。

考えられるのはどれか。

- a 子宮筋腫
- b 子宮内膜ポリープ
- c 子宮腔癒着症
- d 子宮内膜症
- e 子宮腺筋症

別冊
No. 25 写真

43 61歳の男性。昨日、意識障害と右片麻痺とが出現し、今日になって急に悪化したため救急車で搬送された。昏睡状態で自発運動を認めない。頭部単純CT(別冊No. 26)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 膠芽腫
- b 脳出血
- c くも膜下出血
- d 出血性脳梗塞
- e 単純ヘルペス脳炎

別冊
No. 26 写真

44 43歳の男性。歩きにくくなったため来院した。10日前に微熱と下痢とがあり、3日で回復した。3日前に両手指尖部にしびれ感が出現した。昨日は握力が低下し、下肢脱力感を覚えた。今朝起床時に布団から立ち上がることができず、妻に介助されなければ歩けなくなった。意識清明。中等度の四肢筋力低下、四肢遠位部の軽度の感覚鈍麻および四肢腱反射の消失を認める。排尿障害はない。

診断に有用なのはどれか。

- (1) 便細菌培養
- (2) 脳脊髄液検査
- (3) 運動神経伝導速度検査
- (4) 頸部MRI
- (5) 末梢神経生検

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

45 28歳の男性。食事中に急に動作が止まってしまい、まばたきをするだけで話しかけても応答しない状態が数秒間続く発作を主訴に来院した。家族によれば、この発作は3年前から気付かれ、週に数回の頻度で出現している。身体所見に異常を認めない。脳波(別冊No. 27)を別に示す。

考えられるのはどれか。

- a 欠神発作<小発作>
- b 強直間代発作<大発作>
- c 単純部分発作
- d 複雑部分発作<精神運動発作>
- e Lennox-Gastaut 症候群

別冊
No. 27 図

46 43歳の男性。肩こり、頸部痛および歩行困難を訴え来院した。頸部の運動に伴い上肢に放散するしびれ感と下肢腱反射の亢進とを認める。頸部MRIのT₂強調矢状断像(別冊No. 28)を別に示す。

この患者にみられるのはどれか。

- (1) 上腕二頭筋腱反射減弱
- (2) 上肢の挙上困難
- (3) Hoffmann 反射陰性
- (4) 書字困難
- (5) 排尿困難

a (1)、(2)、(3) b (1)、(2)、(5) c (1)、(4)、(5)
d (2)、(3)、(4) e (3)、(4)、(5)

別冊
No. 28 写真

47 13歳の男子。左膝痛を主訴に来院した。8歳時から週3回サッカーをやっている。左膝には中等度の水腫を認め、屈曲時の疼痛を訴えている。

考えられるのはどれか。

- (1) Osgood-Schlatter 病
- (2) 半月板障害
- (3) 膝蓋軟骨軟化症
- (4) 特発性骨壊死症
- (5) 変形性膝関節症

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

48 23歳の女性。頭痛と発熱とを訴えて来院した。1週前に抜歯を受け、その3日後から38℃の発熱と頭痛とが出現してきた。頭痛は次第に強くなり、嘔吐するようになった。体温39℃。呼吸数35/分。脈拍110/分、整。意識は清明であるが、項部硬直を認める。明らかな麻痺はない。血液所見：赤血球400万、白血球12,000。血清生化学所見：血糖90 mg/dl、総蛋白7.0 g/dl、CRP 8.5 mg/dl(基準0.3以下)。脳脊髄液所見：圧220 mmH₂O(基準70～170)、細胞数850/mm³(基準0～2)で95%以上は好中球、蛋白95 mg/dl(基準15～45)、糖35 mg/dl(基準50～75)、トリプトファン反応陰性。

最も適切な治療方針はどれか。

- a 感受性が判明するまで投薬しない。
- b 抗菌薬を投与する。
- c 抗結核薬を投与する。
- d 抗ウイルス薬を投与する。
- e 抗真菌薬を投与する。

49 2歳の男児。けいれんと意識障害とを主訴に来院した。2月初めに発熱を伴うインフルエンザに罹患し近医でアスピリンを投与された。感冒症状は軽快し解熱したが、10日後、突然の全身性けいれんを数分間に3回観察した。その直後から意識障害も出現した。体温37.6℃。昏睡状態であるが項部硬直とKernig徴候とを認めない。眼球結膜と皮膚とに黄染はない。右肋骨弓下に肝を4 cm 触知し、辺縁鈍・弾性硬である。脾は触知しない。血清生化学所見：血糖30 mg/dl、アンモニア220 μg/dl(基準18～48)、総ビリルビン0.6 mg/dl、GOT 110 単位(基準40以下)、GPT 330 単位(基準35以下)。脳脊髄液所見：細胞数2/mm³(基準0～5)、蛋白30 mg/dl(基準15～45)、糖50 mg/dl(基準50～75)。

診断確定のために必要なのはどれか。

- a 血中アスピリン濃度測定
- b 髄液ウイルス抗体価測定
- c 脳波
- d 脳シングルフォトンエミッションCT(SPECT)
- e 肝生検

50 35歳の男性。全身倦怠感と体重減少とを訴えて来院した。全身の皮膚と口腔粘膜とに色素沈着を認める。脈拍88/分、整。血圧98/50 mmHg。血清生化学所見：Na 128 mEq/l、K 5.4 mEq/l。尿中17-OHCS 1.1 mg/日(基準3～8)、尿中17-KS 1.2 mg/日(基準3～11)。

診断に最も有用な検査はどれか。

- a TRH 試験
- b バソプレシン試験
- c メトピロン負荷試験
- d デキサメサゾン抑制試験
- e ACTH 試験

51 38歳の女性。近医で高血糖を指摘されて2か月前に来院した。その1か月前から、全身倦怠感と口渇とを自覚していた。身長158 cm、体重52 kg。空腹時血糖280 mg/dL。食事療法、運動療法およびインスリン注射で血糖値は徐々にコントロールされ、現在の空腹時血糖は140 mg/dLである。

今後の治療方針を決定する上で必要な検査はどれか。

- a インスリン負荷試験
- b グルカゴン負荷試験
- c メトピロン負荷試験
- d フロセマイド負荷試験
- e 絶食試験

52 24歳の女性。下腿の腫脹を主訴に来院した。2年前にも同様のことがあったが自然に軽快したため放置した。左下腿は著明に腫脹し熱感がある。足を背屈すると腓腹部に疼痛を認める。血液所見：赤血球390万、Hb 10.2 g/dL、Ht 37%、白血球9,800、血小板8万、PT 11秒(基準対照11.3)、APTT 86秒(基準対照32.2)。血清生化学所見：尿素窒素12 mg/dL、GOT 36単位(基準40以下)、GPT 32単位(基準35以下)、アルカリホスファターゼ220単位(基準260以下)。CRP 4.6 mg/dL(基準0.3以下)。抗核抗体160倍(基準20以下)。

この疾患でみられるのはどれか。

- (1) 嚥下困難
 - (2) 結膜炎
 - (3) 筋炎
 - (4) 習慣流産
 - (5) Budd-Chiari症候群
- a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

53 32歳の男性。微熱と痤瘡様発疹とを主訴に来院した。数年来、舌と口腔内とに有痛性の潰瘍が繰り返し出現した。皮膚には頸部と前胸部とに毛囊に一致して小膿疱を認める。また、陰囊には境界明瞭な径10 mmの潰瘍を認める。血液所見：赤沈68 mm/1時間、Hb 12.2 g/dL、白血球9,800。CRP 2.6 mg/dL(基準0.3以下)。

この疾患にみられるのはどれか。

- (1) 髄膜炎
 - (2) 大動脈瘤
 - (3) 回盲部潰瘍
 - (4) 糸球体腎炎
 - (5) 仙腸関節炎
- a (1)、(2)、(3) b (1)、(2)、(5) c (1)、(4)、(5)
d (2)、(3)、(4) e (3)、(4)、(5)

54 25歳の女性。昨日夕方から多弁で理解困難な言動が多くなり、本日朝から興奮が強くなったため即日入院となった。4日前から38℃台の発熱と頭痛とがあり、「今朝何をしたかわからない。」「変なおいがする。」という訴えがあった。軽度の項部硬直以外に神経学的異常を認めない。血清生化学所見：血糖98 mg/dL。脳脊髄液所見：圧190 mmH₂O(基準70~170)、水様透明、細胞数30/mm³(基準0~2)ですべてリンパ球、蛋白73 mg/dL(基準15~45)、糖61 mg/dL(基準50~75)。頭部CTで両側側頭葉の浮腫性変化を認める。

最も適切な薬剤はどれか。

- a アシクロビル
- b アンピシリン
- c アンホテリシンB
- d ハロペリドール
- e フェニトイン

55 25歳の男性。尿道のかゆみと分泌物とが持続するため来院した。14日前に異性との性交渉があった。7日前から尿道の痒痒感と下着に分泌物を認め、近医でペニシリン系薬剤を投与されたが軽快しなかった。直腸診後に尿道口から白色の排膿がある。尿所見：蛋白(±)、糖(-)、沈渣に白血球 30～50/1視野。

行うべき検査はどれか。

- a 中間尿の尿沈渣鏡検
- b 尿カンジダ培養
- c 分泌物淋菌培養
- d 分泌物クラミジア DNA 診断
- e 尿道鏡検査

56 25歳の初産婦。重症妊娠中毒症のため入院中であったが、妊娠 38週で肝機能異常を伴うようになったので分娩誘発が行われた。遷延したものの経膈分娩で出産した。産褥 3日に 38℃を超える発熱が 6時間持続している。触診上子宮底は臍下 2cm、強度の圧痛を訴える。腔鏡診で、子宮口は開いており、悪臭を伴う赤色帯下が中等量認められる。血液所見：赤血球 350万、Hb 10.5 g/dl、白血球 22,000、血小板 17万。血清生化学所見：GOT 160単位(基準 40以下)、GPT 120単位(基準 35以下)。

適切な治療薬はどれか。

- (1) オキシトシン
 - (2) エルゴメトリン<麦角薬>
 - (3) アンピシリン
 - (4) クリンダマイシン
 - (5) テトラサイクリン
- a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

57 46歳の男性。手指の皮疹を主訴に来院した。自宅で熱帯魚を飼育していた。6か月前、右中指指背に擦過傷を受傷したが、素手で水槽内の熱帯魚に触れていた。1か月後、皮疹が出現したが放置したところ、徐々に拡大してきた。手指の写真(別冊No. 29)を別に示す。生検病理標本で Ziehl-Neelsen 染色陽性の病原体を認めた。

診断はどれか。

- a 瘰癧
- b 丹毒
- c 非結核性<非定型>抗酸菌症
- d 梅毒
- e 癬風

別冊
No. 29 写真

58 38歳の男性。発熱、乾性咳嗽および呼吸困難で緊急入院した。口腔カンジダ症を認める。動脈血ガス分析(自発呼吸、room air)pH 7.41、PO₂ 60 Torr、PCO₂ 28 Torr、HCO₃⁻ 17 mEq/lであった。誘発喀痰の Grocott 染色で原虫嚢子が確認された。胸部エックス線写真では、両肺にすりガラス様陰影を認める。患者の同意を得て実施したヒト免疫不全ウイルス(HIV)抗体検査は陽性である。

診断はどれか。

- a マイコプラズマ肺炎
- b MRSA 肺炎
- c クラミジア肺炎
- d サイトメガロウイルス肺炎
- e ニューモシスチス・カリニ肺炎

59 14歳の男子。修学旅行の第2日の昼食に弁当を食べ、2時間ほどして水様性下痢と激しい嘔気・嘔吐とがあり、その後腹痛が出現してきたため来院した。発熱はなく、血便もない。同じ症状を訴えている同級生が多い。

考えられる原因菌はどれか。

- a 黄色ブドウ球菌
- b カンピロバクター
- c サルモネラ
- d 腸炎ビブリオ
- e ウェルシュ菌

60 20歳の男性。造船所の作業員。長期間密閉されていた船倉に作業のため入ったところ、ハシゴからずり落ち墜落した。

直ちに現場に急行した産業医の対応として誤っているのはどれか。

- a 船倉内に許可なく入らぬよう指示する。
- b 火気の使用を厳禁する。
- c 二酸化炭素濃度の測定を指示する。
- d 救出作業者に空気タンクの使用を指示する。
- e 送風機による船倉内の換気を行わせる。

◎ 下記の欄に受験番号および氏名を記入すること。

受 験 番 号	氏 名 (楷 書 で 書 く こ と)